

文化

文化と子どもの
画家

いわさきちひろ
生誕100年

日本童画会に入会

松本 猛

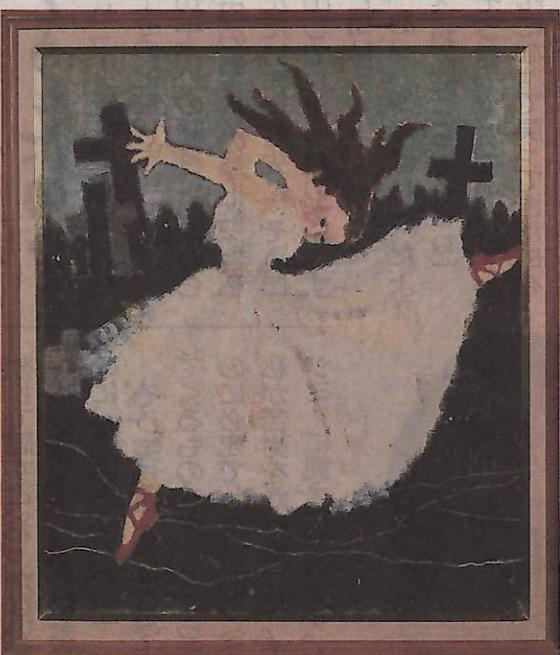
(1)

ワンピースを自分で仕立ててしまつこともあつたが、敗戦後の混乱期では生地を買う余裕はない。

ちひろは新聞記者をしながら丸木アトリエや芸術学校で絵を学び、平和運動にも積極的に参加していた。

一方、貧しいながらも、生活を楽しむことも忘れてはいなかった。つてを頼つて近くの映画館のフリーパスを手に入れ、好きな映画を繰り返し見ていた。

中でも気に入っていたのはタンバーンズの王、フレッド・アスターだつた。ちひろの映画の見方は、ストーリーは一の次で踊りや音楽や衣装や背景を楽しむものだった。戦前は映画で見た



「赤いくつ」 1951年 (ちひろ美術館所蔵)

ちひろは新聞記者をしながら丸木アトリエや芸術学校で絵を学び、平和運動にも積極的に参加していた。

一方、貧しいながらも、生活を楽しむことも忘れてはいなかった。つてを頼つて近くの映画館のフリーパスを手に入れ、好きな映画を繰り返し見ていた。中でも気に入っていたのはタンバーンズの王、フレッド・アスターだつた。ちひろの映画の見方は、ストーリーは一の次で踊りや音楽や衣装や背景を楽しむものだった。戦前は映画で見た

はめいに会い、実家の松本に帰かつたようで、時間をつくつてはめいに会い、実家の松本に帰つたようだ。時間を持つてはめいに会い、実家の松本に帰つたといえ、仕事を断つてもついて行つたという。

当時のエッセーにはこんな言葉が残っている。「(中略) わたくしはそれをきなので、ひまなときにはいつも窓からくひをだしてみています。(中略) わたくしはそれをみつけると、いつもスケッチいたします」。時にはあめをあげたします。時にはあめをあげるといつて、下宿に誘いモデルにすることもあります。

そんなちひろに、日本童画会

かつた。それでも、つば広の帽な付け襟を賣い、おしゃれをして町を歩いていた。

上京してから2年近くがたつた1948年2月末、妹の世史子に娘が生まれる。もともと子ども好きのちひろだったが、めいの誕生は、ことのほかうれしかった。

かつた。それでも、つば広の帽な付け襟を賣い、おしゃれをして町を歩いていた。

上京してから2年近くがたつた1948年2月末、妹の世史子に娘が生まれる。もともと子ども好きのちひろだったが、めいの誕生は、ことのほかうれしかった。

尊敬する描き手とともに

へ入会するチャンスが訪れた。日本童画会は、ちひろが幼いころ「コドモノクニ」で親しんだ武井武雄や初山滋らを中心に戦後、新たに立ち上げられたグループだつた。

ここに掲載した作品は1951年の日本童画会展での受賞作である。ちひろが尊敬する初山滋は「この人はうますぎる程だ」と激賞したという。

ちひろは日本童画会に入った時のこと、後にこう語っています。「武井武雄先生、初山滋先生とはじめてお目にかかりました。あふれる感動で胸がいっぱいになつた。ああこの先生方の絵で私は大きくなつたのだ。私の心のなかには、幼い日見た絵の心のなかには、幼い日見た絵がまだ生き続けている」

ちひろは、日本童画会に参加し、確信をもつて子どもの本のための画家として歩み始めた。

(美術評論家)
〔土曜日に掲載します〕